

Eureka XII

六年制通信 No.37 令和7年2月7日(金)号

雄弁は銀

今から30年ほど前でしたか、仙台の青葉山公園に行ったことがあります。君たちにとって仙台の生んだ偉人と言えば伊達正宗でしょうが、私にとってのヒーローは土井晩翠です。ですから公園内の正宗像には見向きもせず晩翠の胸像の写真を撮って喜んでいました。晩翠は詩人として初の文化勲章受章者ということですが、私にとっては偉大な翻訳家なのです。知らないと思いますが、晩翠は斎藤秀三郎に英語を、神田乃武(ないぶ)にラテン語を習っています。これは君たちが映画俳優になろうとしたとして、例えば演技指導をトム・クルーズに受けるようなものです。驚くべきことに晩翠はラテン語に飽き足らず古典ギリシア語を勉強しはじめ、何とホメロスの『イーリアス』と『オデュッセア』の原典訳を出版しています。しかも格調高い七五調でね。ホメロスの二冊はもともと語り継がれたものであるため、音読すると非常に心地よいリズムがあります。ちょっと難しいでしょうが、長短六歩格(ヘクサメトロス)を基調としています。もし興味があれば、図書館の私のコーナーに『イーリアス』を入れてあるから手に取ってごらん。そして音読してごらん。原文の感じが少しはわかると思います。のちに西洋古典文学の泰斗松平千秋が岩波文庫版としてホメロスを翻訳するとき、もっとも参考になったのが晩翠訳であったと書いています。最近出た中務哲郎訳の『オデュッセイア』が格調のある日本語訳としては最後になるのではないかと私は思っています。読む側の日本語が貧しくなっているのも一因ですね、きっと。

トーマス・カーライルというスコットランドの評論家があります。19世紀に活躍した人です。この人の『衣服哲学』(Sator Resartus)は冒頭の一文が **Considering** から始まる112語の長文で、この本を日本のどの大学でもいいので英文学専攻の大学院生にテキストとして使おうとする教授がいたとしたら、そりゃ無茶だと顰蹙を買うに違いないと東京大学の偉い先生がどこかに書いていましたな。それくらい難解な英語なのです。余談ですが、そんな難解な本を新渡戸稲造は18歳で初めて読んで感動し、以来何十回と読んだと言っています。いつもながら、あの時代の教養人のレベルの高さには驚かされます。さて、晩翠はこの本の翻訳を『衣裳哲学』と題して出しています。これまた立派な日本語です。こういう本を復刻すべきだよなあ。今は岩波文庫にある石田憲次訳の『衣服哲学』が手に入ると思います。

この本の中に私たちのよく知っている「雄弁は銀、沈黙は金」という言葉が出てきます。日本でこの言葉が使われるようになったのは、カーライル起源と言われていまず。実は原文は先にドイツ語で書いてあって、すぐ後ろに括弧で (Speech is silver,

Silence is golden.) とつけ加えています。silvern は silver の古形です。「雄弁」ですから、君たちなら Eloquence を習うわけですが、Speech なのですね。Silence と頭韻を踏ませたのかもしれませんが、ドイツ語でも英語の Speech に当たる語が使われています。いずれにしても Speech と雄弁ではずいぶん印象が違います。晩翠はこれを「物言ふは銀である。物言はぬは金である」と訳しています。さすがですね。

「雄弁は銀、沈黙は金」という趣旨の言葉はどの民族にも共通してあるのではないかと私は思います。聖書にもあるユダヤ教にもあるようです。古今東西こういった発想を人間はするのですね、きっと。昨今は、しかし、この「沈黙は金」が忘れ去られているように思います。とにかく誰もが何かに対して「つぶやかないと」いられないのですね。しかも、つぶやくと言えば小さな声で、でしょうが大声で「つぶやく」人が多くて騒がしいですね。テレビのようなメディア（最近はオールドメディアと言うのだそうですね）はもともとそういう性質があると思いますが、それにしてもちょっと度が過ぎてきている気がします。それに、日本人は「川に落ちた犬を棒で打つ」ような発想はなかったはずなのですが、それも忘れられているように思います。日本人は「どんな悪人でも死んだら仏」、「死者に鞭打つことはしない」という思想があったはずですが。幹や根ではなく枝葉の正義を振りかざすことは、自分を棚に上げる場合が多いから、みっともないことなのだよと教えられました。いい大人が寄ってたかって小さな正義を声高に叫ぶ姿を見ると、私が教わってきたことは何だったのだろうと思ってしまいます。「物言ふは銀である。物言はぬは金である」がいいよね。

今週のおすすめ

・道尾秀介 『いけない』 (文春文庫)

道尾さんは前にも紹介していますが、面白いのだから仕方ないよね。初めにこの本の使用方法が書いてあります。

・まずは各章の物語をじっくりとお楽しみください。 ・各章の最後のページには、ある写真が挿入されています。 ・写真を見ることで、それぞれの“隠された真相”を発見していただければ幸いです。

各章のタイトルは次の通り。第一章…死んだのは誰か？第二章…なぜ死んだのか？第三章…罪は誰のものか？第四章…????????

事件の起こる町は同じ。四つの物語はそれぞれが連作のように繋がっています。全体としては一種の叙述トリックだと思います。読者をミスリードして行って、最後に写真を見て「あれ？」と思わせる、と。読み進めていくにしたがって、写真の謎のヒントが出てきたりしますが、写真を見た瞬間に謎を解くのは難しいかも。最終章は簡単ですけどね。私、第一章の写真で勝手に死んだと思い込んでいた人が違う人だとわかるまで時間がかかりました。第二章では虫眼鏡で見ないとわかりませんでしたよ、写真の意図が。これは道尾さんの意欲作ですね。こんなに工夫された作品、私は知らないです。写真の謎がわからないともやもやだけが残るかもしれません。

BGMは Kenny Loggins の *Footloose* でした…。